

# Cynthia Ozick: *The Shawl* —ローザが喪失したもの

太田 由佳

## はじめに

シンシア・オジック (Cynthia Ozick, 1928-) はロシア系移民の両親を持ち、移民二世としてニューヨークで生まれ育つ。ユダヤ系アメリカ人の現代女流作家であり、批評家、フェミニストとしても知られる。オジック作品は、その描写、表現が独特であると言われている。個性的な文体や描写、表現にも拘らず、豊富な語彙力を駆使して描かれるオジック作品に惹きつけられる読者もまた多い。*The Shawl* (1989) はオジックがホロコーストについて書いた作品である。

## 作品背景

*The Shawl* は二つの短編で構成されている。第一部 “The Shawl” (1980) と第二部 “Rosa” (1983) はそれぞれ、雑誌 *The New Yorker* に掲載された。

第一部 “The Shawl” は、第二次世界大戦中のポーランドの強制収容所が舞台となっている。ポーランドの極寒の冬、母親ローザ、その娘マグダの親子と、ローザの姪ステラは強制収容所に収容されている。

第二次大戦中、ヒトラー率いるナチ党の政策により、排斥の対象とされたユダヤ人たちは、次から次へと拘束され強制収容所に送られ、大量虐殺された。捕らえられたユダヤ人たちは、強制収容所で、食べ物もろくに与えられず、強制労働を強いられた。子供や老人、病気の人たちは労働力の即戦力にならないため、即座に殺されたのだ。中谷剛の『アウシュヴィッツ博物館案内』の中でも、「アウシュヴィッツ強制収容所では幼い子どもたちは不要の存在とみなされ、到着するとすぐに殺されました」(中谷 131) と述べられている。

第二部 “Rosa” は、戦後 30 年ほど経ったアメリカが舞台である。ホロコーストから生き残ったローザは姪のステラと共にアメリカに渡るが、ローザは一人フロリダ州で暮らす。ステラに送金をしてもらいながら、なんとか生活している状況である。時は流れ、

常に死に怯える生活をするとはなくなったが、強制収容所で我が娘を失ってしまったことにより生気を失い、その心は常に孤独を感じていた。ローザは、アメリカという新しい土地に生きながらも、過去から抜け出すことができていない。そのような日常生活を送る中、ローザは、パースキーという同郷の男性とコインランドリーで出会う。

ホロコーストという出来事は、多くのユダヤ人たちの命を奪い、人々の人生や、その人たちの戦後の人生をも奪った。主人公ローザもまた犠牲者の一人である。ローザが、戦時中、戦後に喪失してしまったものについて読み解いていきたい。

## 戦時中

前述したように、強制収容所では、幼すぎる子供たちは労働力にならないため、すぐさま殺される対象となった。しかしローザは娘のマグダをショールで隠し守ろうとする。ローザは強制収容所の点呼の際に、いつも兵舎の脇にマグダを置き、その上にショールを被せていた。ところが、マグダはここ数日で歩けるほどに成長する。ついには、タイミング悪く広場に這い出してしまう。ローザは、マグダもしくは、ショールどちらを取りに行くのか悩む。

Fetch, get, bring! But she did not know which to go after first, Magda or the shawl. If she jumped out into the arena to snatch Magda up, the howling would not stop, because Magda would still not have the shawl; but if she ran back into the barracks to find the shawl, and if she found it, and if she came after Magda holding it and shaking it, then she would get Magda back, Magda would put the shawl in her mouth and turn dumb again. (8)

先にマグダのところに行けば、ショールを持っていないマグダはうめき声をやめないだろうし、ショールを先に取りに行けばマグダは大人しくなってくれる。母親として、娘を守るための行動を慎重に考えているローザの姿が浮かぶ。そして次の引用からわかるように、どこからともなくローザを後押しするように、声が聞こえ、ローザはショールを持ち上げ、それを広げ、振った。

The voice told her [Rosa] to hold up the shawl, high; the voices told her to shake it, to whip with it, to unfurl it like a flag. Rosa lifted, shook, whipped, unfurled. (9)

ローザは、どこかからの声によって知らず知らずのうちにショールを選ばざるを得な

かったことが窺える。娘のマグダは、ドイツ兵に見つかり、連れ去られ、最終的に有刺鉄線に投げつけられ、殺されてしまう。次の引用で述べられているように、ローザにマグダのところに走って向かうようにと、またしても声が聞こえる。

[T]he steel voices went mad in their growing, urging Rosa to run and run to the spot where Magda had fallen from her flight against the electrified fence; but of course Rosa did not obey them. (10)

ローザが聞こえた声は、マグダを助けるようローザを促した。ローザの母性本能が示された声である。しかしローザは、マグダがフェンスに投げられ落ちた場所に走り寄ることもできなかった。

[Rosa] took Magda' s shawl and filled her own mouth with it, sniffed it in and stuffed it in, until she was swallowing up the wolf' s screech and tasting the cinnamon and almond depth of Magda' s saliva; and Rosa drank Magda' s shawl until it dried. (10)

ローザは、ドイツ兵がマグダを有刺鉄線に投げつけられるのを黙って見つめるしかなかった。母親として助けることができず、無力さや悔しさを感じた。遠くとは言え、目の前で我が子を殺されるその状況の壮絶さは計り知れない。ローザのさまざまな想いが交錯していることが窺えよう。母親としての本能が働くならば、すぐにマグダのことを助けに行くであろう。しかし、強制収容所という環境にいるその状況は、ローザの精神状態を不安定にさせてしまった。Joseph Lowin は、*Cynthia Ozick* (1988) の中で、“strong maternal instincts” (Lowin 106) また、“the instinct of self-preservation” (Lowin 106) という言葉を用いている。姪ステラは、マグダに対して嫉妬して、食べ物を与えなかった。それは強制収容所という環境の中で生きのびることに必死で周りの事を考えることができない未熟な成長期の少女を思わせると同時に、自分を守るという人間としての本能でもある。反対に、すでに出なくなった母乳を吸わせ、ほとんどの食べ物を娘に与えていたローザには、母親としての本能を強く感じられよう。前述したように、娘が殺されるところを目の当たりにし、助けに走ることもできなかったという胸が張り裂けそうな思いをする一方、黙って見守るしかなかったローザにも不本意とはいえ少なくとも、“the instinct of self-preservation” (Lowin 106) があったことが窺えよう。前述の場面では、自己防衛本能と母性本能の両方がローザの心に同時に沸き起こり、心に迷いを生みだしたと考えられる。もし、マグダを助けに行こうものなら銃殺されかねない。つまり、親子

共々が犠牲となる。自分の身を守ることに加え、母親として子供を守るべきだったというローザの苦しい心の状態が窺える。結果的にローザ自身は助かり、生き延びることはできたが、娘のことを助けることはできなかった。しかし、マグダが死んだことは決してローザのせいではない。ローザは母親として、自分の食べ物を与え、ショールに隠すことで、娘を守ってきた。自己犠牲を払い、娘の存在をしっかりと意識していた。母親としての本能がそうさせていたのだ。しかし、最後には死んでしまった娘の姿を遠くからただ見つめるしかできなかった。ショールを口に詰め込むローザの姿からは、悲しみだけではなく、娘のために飛び込んで助けることができなかった自分自身の母親としての責任が果たせなかった悔しさをも感じさせる。自己防衛本能が、母性本能より強く働いてしまった。娘を亡くしたことに加え、自分自身の無力さがローザの大きな喪失感になっていると考えられよう。

### ローザの戦後の苦しみ

ローザは、その喪失感や娘を失った過去を引きずったまま、戦後30年あまりが経過した現代アメリカ社会で生活を送る。ところが、ローザは強制収容所での悲劇とはまた異なる苦しみを感じてしまう。戦争は終わり、自分自身が危険にさらされるはずはないアメリカという土地にいるにもかかわらず、ローザの心の苦しみは解き放たれていない。彼女は姪ステラに次のように手紙を書く。

She felt she was in hell. "Golden and beautiful Stella," she wrote to her niece. "Where I put myself is in hell. Once I thought the worst was the worst, after that nothing could be the worst. But now I see, even after the worst there's still more." (14)

ローザはフロリダに住んでいるにもかかわらず、地獄にいるかのように感じていた。そして最悪なことが起こったあとでさえ、まだ最悪なことがある、と気づいたのだ。強制収容所で娘を亡くしたこと、つまり過去のことよりも、まださらに最悪なことが現在起こっていることを表している。戦時中は、死を象徴する場所である強制収容所に収容されていた。しかし現在では、死に怯えることなく、新天地アメリカで暮らしている。平和に暮らしているはずのローザにとって地獄だと思わせるものがあるということである。ローザはステラと共にアメリカに渡るが、一人フロリダに住む。知り合いは誰もいない。住んでいるマンションは老人ホームのようである。ローザはとても孤独な生活を送っている女性なのだ。そして、アメリカに自分の居場所を見いだせていない。それは

ローザと他の登場人物とのやり取りで明らかとなる。

まず、ローザとステラの関係性から見ていきたい。ローザはステラと共にアメリカに渡るが、二人は一緒に生活を送っていない。フロリダに住むステラには時々英語で手紙を書く。ローザに言わせてみれば、ステラは“Columbus!” (42) なのである。コロンブスは1492年にアメリカ大陸を発見した人物であるが、ローザはステラをコロンブスかのように見立てている。ステラはまさにコロンブスのように新大陸アメリカに渡り、英語を習得した。さらに、叔母のローザに送金していることから、自立して生きている女性だと言えよう。ステラの姿は、アメリカに同化しているとローザには映っているのだ。次の引用は、アメリカに同化してしまったステラに対してのローザの気持ちがよく表されている。

Stella, an ordinary America, indistinguishable! No one could guess what hell she had crawled out of until she opened her mouth and up coiled the smoke of accent.” (33)

訛りのある英語を聞くまでは、どこから来たのかさえ推測できない、すっかりアメリカに同化したステラを気に入っていないローザの心境が理解できる。ローザにとっての一番重要な言葉は、戦争前の裕福な生活を送っていた時に話していたポーランド語であり、ローザに言わせると“the most excellent literary Polish” (14) であり、格式高い言語なのである。アメリカに同化し、英語を話すステラに対しての批判的な言い方から窺えるように、現在住んでいるアメリカではポーランド語はまったく意味のないものであるとローザに感じさせているのだ。英語は、ステラがアメリカに同化したことをローザに感じさせる言語である。ローザは英語を使うことに抵抗があるように窺える。それでも英語で手紙を書くことは、アメリカに同化したステラのためだと言えよう。しかし問題は英語だけではない。姪ステラにとってローザは、現実世界に生きていないと感じているのだ。ステラの手紙には、叔母を心配する言葉が並べられた。

You're the older one, I'm the niece, I shouldn't lecture, but my God! It's thirty years, forty, who knows, give it a rest. . . . You're like those people in the Middle Ages . . . Rosa, by now, believe me, it's time, you have to have a life. (31-32)

彼女は、ローザに現実を見てほしいと思っている。ステラにとって、強制収容所での出来事はすでに過去のこととなった。地に足を着けて生活しているからこそ、ローザに言うことができるアドバイスである。叔母に対するステラの厳しい言葉に、優しさが垣間

見える手紙の内容である。しかし、ローザを深く傷つけ、彼女の人生を奪ってしまった過去の出来事は、“Thieves” (32) という表現からも窺えるように、ローザにとっては忘れることができない。また、決して許すことができないのだ。戦争によってローザが失ったものは大きく、“Stella! Would you be alive if I didn’t take you out from there? Dead. You’d be dead!” (32) というローザのセリフからは、誰のおかげでこれまで生きていられるのか、とステラに訴えかけている。ローザもステラも、ホロコーストという悲劇、同じ境遇を共にし、現在は二人ともアメリカで暮らす。英語という言語をはじめアメリカに同化したステラは、現在を生きている。一方では、過去にとりつかれたかのようなローザが存在する。ローザとステラの溝は大きく、共にホロコーストを生き抜いてきた身内にすら理解してもらえない虚しさや孤独をローザは感じている。

コインランドリーで出会った同郷ワルシャワ出身のパースキーとのやりとりでは、次のようにパースキーに指摘される。

“Your English ain’t better than what any other refugee talks.”

“Why should I learn English? I didn’t ask for it, I got nothing to do with it.”

“You can’t live in the past,” he advised. (23)

ローザは、他の難民と比べても英語が上手ではないと、パースキーにはっきりと言われた。それに対してローザは、なぜ英語を学ぶ必要があるのかと主張する。するとパースキーはローザに、「過去に生きることはできない」と忠告した。彼は、ローザの英語が上手ではないことに加え、過去を引きずったまま生きていることを悟ったのだ。アメリカに同化してしまった姪ステラからは直接英語について何か言われたわけではないが、パースキーは直接ローザに英語について言及した。そしてこの直接の質問は余計にローザをいら立たせた。ローザはアメリカに渡り、店を経営し始めた時、人と関わるため、自分のことを話そうとしたが、誰一人としてホロコーストのことを知らなかった。たった30年余りに起きた出来事にも拘らず、誰も何も知らなかったのだ。そのことはローザを驚かせ、過去を話すことをやめさせた。つまりローザは現実との関わりを閉ざしたのだ。パースキーは同じユダヤ人であるが、ローザとは異なる過去を持つ。ローザはポーランドで強制収容所にいた過去を持つ。一方、パースキーは戦前にアメリカに渡っていたので、ホロコーストの悲劇を経験していない。ローザは、パースキーに対して“My Warsaw isn’t your Warsaw.” (19) と強く主張する。ホロコーストを経験することなく、アメリカに渡ったパースキーに、自分のことをそう簡単にわかってもらいたくない、また、英語についても言及されたくない、そのようなローザの心境が窺われよう。ホロコー

ストの出来事は、その地獄から抜け出そうとも簡単に抜け出すことができないローザの心に大きな穴を作ったのだ。“The life before, the life during, the life after.” (58) というように、彼女の人生はホロコーストを中心に回っていると言える。戦争は終わり、自分自身が危険にさらされるはずはないアメリカという土地にいるにもかかわらず、その心の苦しみは解き放たれていない。さらにローザにとって戦前の良き時代、“the life before” (58) つまりホロコースト以前の過去についても、ローザは強く思って生きている。前述したように、格式高いポーランド語だとローザが今もなお誇りに思っている言語に代表されるように、裕福な家庭で過ごしたことをパースキーは知り得ない。同じユダヤ人でありながら、ホロコーストという過去を経験していない他人に心を頑なに閉ざすローザの心境が表されている。“I don’t need new people.” (54) と述べるローザの言葉からも他人を排斥し、現実を避けるローザの心理状態が明白だ。

さらにローザはツリー博士から手紙を受け取る。ツリー博士は、ホロコースト生存者たちの研究をしていて、そのデータを収集しているので、ローザに協力を要請している。この手紙に対してローザは“Disease, disease!” (36) だと言って、自分たちユダヤ人を金儲けの手段として扱っているツリー博士を非難している。さらに以下の引用からローザが憤慨している様子が窺える。

As long as they didn’t have to say *human being*. It used to be refugee,  
but by now there was no such creature, no more *refugees*, only survivors. A name like a  
number counted apart from the ordinary swarm. Blue digits on the arm, what difference?  
They don’t call you a woman anyhow. *Survivor*. (36)

ローザたちホロコーストを生き残った人々は、かつて難民と呼ばれていたが、今では生存者と言われ、それは強制収容所で彫られた腕の囚人番号と何ら変わらないのではないだろうか。ローザにとっては、人間でも女性でもない、生存者という呼び方が気に入らない。自分の人生を何も知らない、ただの病理学者に、生存者という言葉で片づけてほしくないローザの憤りが窺われる。また、ローザは偶然入り込んでしまったホテルで、支配人と言い合いになった。

“Mister, you got barbed wire by your beach.” . . .  
“My name is Finkelstein.”  
“Then you should know better!” (51)

引用は、有刺鉄線（barbed wire）が、ホテルのビーチにあることをホテルの支配人に知らせる場面だ。有刺鉄線は強制収容所を囲っていた電流が走っている柵であり、ローザの娘マグダがドイツ兵に投げつけられ殺された鉄線である。そしてこの支配人の名前（Finkelstein）がユダヤ系の名前であることに気づいたローザは、ユダヤ人なら有刺鉄線についてもっと知るべきだと支配人に言い立てた。しかし、支配人はローザを無視して早くホテルから出ていくように振り切る。このやり取りから、同じユダヤ人に拒否されて苛立っているローザの様子が窺えよう。

## 終わりに

これまでローザと彼女を取り巻く人物との関わりを見てきた。戦時中、つまり強制収容所にいた時、ローザは自分の娘を亡くした。このことは彼女を無力にさせ、それは大きな喪失感となった。さらに、その喪失感は戦後も消えることなく、ローザの心に残っていたのだ。ローザの世界は、現在もまだホロコーストを中心に回っていた。彼女は自分の意思でアメリカに渡ってきたわけではない。自分の居場所を見つけることは非常に難しかった。アメリカに渡ってきたばかりの時は、人と関わることを試みたが結局はうまくいかず、疎外感を感じたのだ。姪とは同じ境遇を共にしたにもかかわらず、ステラはアメリカに同化して暮らしになじんでいる。一方のローザは、アメリカでの暮らしになじめず、心は過去に縛られていた。同郷のパースキーには、現実を生きていないことを指摘される。ローザが心に深く刻み込まれた過去から解放されることは簡単ではない。さらに、研究対象として近づいてきたツリー博士や、ローザの過去や背景を知らないホテルの支配人からは完全に相手にされていない。このように、戦後のローザは、過去を引きずったまま孤独を抱え生きている。ホロコーストの出来事がローザに残したものは大きな精神的喪失感だったと言える。

## 引証文献

- Friedman, Lawrence S. *Understanding Cynthia Ozick*. Columbia, SC: U of South Carolina P, 1991.
- Hirose, Yoshiji. *The Symbolic Meaning of Yiddish*. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, 2002.
- Lowin, Joseph. *Cynthia Ozick*. Boston: Twayne Publishers, 1988.
- Ozick, Cynthia. *The Shawl*. New York: Vintage Books, 1990.
- Shatzky, Joel. *Contemporary Jewish-American Novelists: a bio-critical sourcebook*. Westport,



- Conn: Greenwood, 1997.
- Weinreich, Uriel. *Modern English-Yiddish, Yiddish-English dictionary*. New York: Schocken Books, YIVO Institute for Jewish Research, 1977.
- 佐藤健一. 『アメリカ・ユダヤ系作家論』フタバ書店, 1975.
- 中谷剛. 『アウシュヴィッツ博物館案内』凱風社, 2005.
- 日本聖書協会『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』.
- 広瀬佳司. 『増補版 ユダヤ世界に魅せられて』彩流社, 2019.
- 編著. 『笑いとユーモアのユダヤ文学』南雲堂, 2012.
- 編著. 『ユダヤ系文学に見る教育の光と影』大阪教育図書, 2014.
- 編著. 『ユダヤの記憶と伝統』彩流社, 2019.
- ロステン, レオ. 広瀬佳司監修. 『新イディッシュ語の喜び *The New Joys of Yiddish*』大阪教育図書, 2013.

✦ おおた ゆ か  
太田 由佳